人間と自然資源 第1回

地域づくりから始まるサンゴ礁保全活動

石垣島白保集落としらほサンゴ村の取り組み

古田尚也 IUCN日本リエゾンオフィスコーディネーター

青い空と世界最大級のアオサンゴ群落。のどかな南国の集落に見える石垣島白保集落は、同時に空港問題に翻弄されてきた。こうした中、〝しらほサンゴ村〟の上村真仁さんはどのようにして集落の人たちと一緒に地域づくりとサンゴ礁保全に取り組んできたのか。

取材・文・撮影●古田尚也

白保の海は「魚湧く」と言われるほど豊富な水産資源の宝庫でもあった。しかし、近年は過剰な漁獲、赤土の流入などで水産資源が劣化している。

逆風の中でのスタート

人口約4万7000人の石垣島は、西表島、与那国島、竹富島などからなる八重山諸島の政治、経済、交通の中核を占める島である。石垣島の市街地から車で20分ほどの場所に位置する白保は、その前面に世界最大級のアオサンゴ群落が広がり、赤瓦や石垣が残る伝統的景観も印象的な集落だ。農業が基幹産業である白保は、地縁・血縁のきずながともに強く、伝統的な神事や祭事を受け継ぐ芸能の村としても知られている。

一見のどかな南国の集落に見える白保集落も、1970年代からの「空港問題」を巡って大きく揺れ動いてきた。それは、1979年に白保のサンゴ礁の海を埋め立てて新しい空港を造ることが地元に何の相談もなく県から発表されたことから始まった。

白保集落は、この計画に対し全会一致で反対を決議する。ここから、空港反対運動が国内外のさまざまな関係者を巻き込んで始まっていく。世界最大の自然保護団体のひとつであるWWF（World Wide Fund for Nature：世界自然保護基金）は、1985年に白保海域のサンゴ礁調査を行い、ここが北半球最大・最古のアオサンゴの一大生息地であることを明らかにする。

こうしたなか、WWFが全国の支援者からの募金や寄付により、2000年にオープンしたのが、「サンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）」である。

サンゴ村で現在センター長を務める上村真仁さんは、今から11年前の2004年1月、東京のシンクタンクを辞め白保にやってきた。まちづくりが専門で、イギリスの大学やNGOで学び、海外の事情にも詳しい上村さんは、「地域住民主体のサンゴ礁保全と持続可能な資源管理」という仕事内容にひかれ白保に飛び込んだのだった。

しかし、「こちらに来てみたら、現実は大変厳しく、逆風の中でのスタートでした」と上村さん。空港計画は、2000年3月に白保の海上埋め立てではなく、陸上に

白保の海には世界最大級のアオサンゴ群落が広がる。（写真提供：WWF）

上／日曜市は、しらほサンゴ村の施設を地元に開放して開催されている。
下／しらほサンゴ村には、白保集落の聞き取りをもとにして作った「白保今昔展」のパネルが飾られており、白保の人々の自然とのかかわりや文化について学ぶことができる。

しらほサンゴ村センター長の上村真仁さんは、11年前、東京から白保に飛び込んだ。（しらほサンゴ村：http://www.wwf.or.jp/shiraho　電話：0980-84-4135）

造られることが関係者間で合意された。この案には、白保集落も条件付きで賛成したが、WWFは自然保護の立場からこの案に懸念を示し、地域との溝を深めていた。

「こんな状態では、地域住民主体のサンゴ礁保全などできるわけがない。自分たちがまず白保集落の人たちに受け入れられ、信頼関係を築くことが必要だ。そのためには、まず地域の人たちと一緒に地域づくりをしていくことから始めないといけないと考えた」と当時を振り返って上村さんはいう。

地域の人たちのための地域づくりを始める

まずは地域の人たちの考えを知る必要があると、上村さんは公民館長（白保集落の責任者）のもとにアンケート調査をしたいと何度も通い詰めた。すると、偶然も上村さんに味方する。

ちょうど、白保集落では、2004年度に石垣市の離島・過疎地域ふるさとづくり支援事業が始まった。上村さんは、この中で次世代プラン班のメンバーとなり、専門を活かしてアンケートやワークショップ、古老からの聞き取り、子供たちとの街歩きによる地域の宝物さがしなどを行った。

同事業は1年で終了したが、次世代プラン作りだけは、その後も白保公民館事業として活動を継続。十数回のワークショップの成果は「白保村ゆらてぃく憲章」として2006年5月に結実する。

全部で7条からなる憲章は、「海と緑と心をはぐくむおおらかな白保」をむらづくりの目標とし、サンゴ礁保全も盛り込まれた。公民館が取り組む村づくりの中にサンゴ礁保全が正式に位置付けられたことで、「サンゴ礁の保全」イコール「空港反対」という空港問題の最中の状況が変わり、サンゴ礁保全に取り組みやすい状況が生まれた。

ちなみに、「ゆらてぃく」とは、白保の言葉で「寄ってらっしゃい」を意味する言葉で、白保を代表する民謡『白保節』に謡われている白保の人たちの気質をもっともよく表すものだという。

憲章制定の動きと並行して、上村さんは実践のためのさまざまな活動にも着手する。たとえば、2004年には地域のおばあたちと一緒に郷土料理研究会を始めた。

2005年には、「白保魚湧く海保全協議会」もスタートさせる。

白保魚湧く海保全協議会では、伝統的漁法であるインカチ（海垣）を復元し、毎年体験漁を行って地域の人々に海で楽しんでもらう取り組みも行っている。（写真提供：WWF）

白保では、伝統的に半農半漁の暮らしを営んできたことから地先の海に対する所有者意識が強い。当時すでにシュノーケル観光などが始まっていたが、集落共有の財産で特定の事業者が収益を上げることへの批判の声が聞かれるようになっていた。また、観光事業者側もバラバラで海の利用ルールが全くなかった。

そして何よりもサンゴ礁を保全するためには、赤土の流出防止のために農家にも協力してもらわなくてはならない。

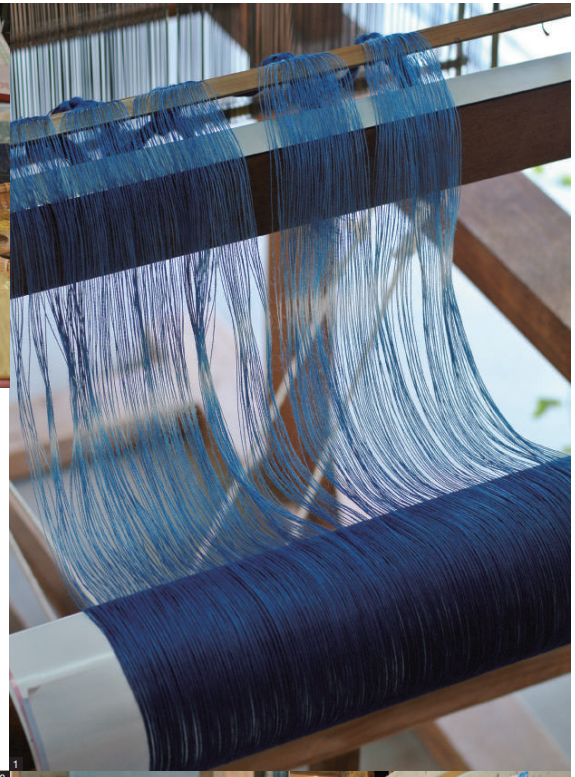
白保公民館長をはじめ、集落の各種団体や、農家、畜産家、漁師、観光業者など多様な人たちが集まり、海の利用ルールについて話し合うとともに、サンゴ礁を保全し、その持続的な利用による地域の活性化について議論する場として協議会の活動がスタートする。

協議会では、観光客、シュノーケル観光事業者、研究者、シャコガイの禁漁区の4つのローカルルールを策定した。

同時に、インカチ（海垣）の復元にも取り組んだ。インカチとは、海の中に石垣を積んで囲いを作り、そこに入った魚を取る伝統的な漁法で、主に白保の農家の人たちが昔行っていたものだ。

「サンゴ礁保全のためには、農家の人たちに赤土の流出対策に協力をしてもらうことが必要です。しかし、最近では農家の人たちの海とのかかわりが減っていました。海とのつながりを取り戻すきっかけとして、インカチを再現し、旧

左／白保魚湧く海保全協議会会長の新里昌俊さん。白保ハーリー組合の前組合長でもある。白保では新里さんのような海人は、主に戦後移入してきた。
右／海神（ハーリー）祭は、豊漁と航海の安全を祈願するため40〜50年前から始められたという。（写真提供：大島淑）



1 白保日曜市に出品している松竹喜生子さんは、白保日曜市運営組合の共同代表の一人。サンゴ村の近くで染色工房「なわた」を営んでいて、見学も可能だ。2「なわた」では、伝統的な方法で染色と織物の実演が行われており、商品も購入することができる。3白保日曜市の人気メニュー、月桃の葉でつつんだカナッパおにぎり。「カナッパ」とは地元の言葉で葉っぱのこと。月桃の葉は、サンゴ礁保全のために農地の周りに植えられているものを買い上げて使用している。おにぎりを食べることでサンゴ礁保全に貢献することができる。4白保日曜市運営組合の共同代表の大泊キミ子さん。カナッパおにぎりに使われているお米は大泊さんの田んぼでとれたもの。

5日曜市は10年前から月1回のペースで始まったが、2012年から毎週開催されるようになり、2013年の新空港開港によって、さらに人気となっている。6ハイビスカスの花を摘んで、シークァーサー、砂糖で作られているシロップ。NPO夏花による白保日曜市ブランド商品。（問い合わせ先：グリーンズファーム　電話：0980-87-0355）7松竹喜生子さん（右）と娘の未来さん。松竹さんは、沖縄県指定無形文化財「八重山上布」保持者でもあり、NPO夏花の理事でもある。8宮良祐八さんは、手作り民芸品を日曜市で販売している。民芸品の材料は、みずからが山や原野で採取した草木など、天然素材のみを使用している。

暦の3月3日に漁を行い、海の恵みに感謝する日にしようと考えました」と上村さんはいう。

この間、2004年12月には、離島・過疎地域ふるさとづくり支援事業の一環として「白保ゆらていく祭り」も始まった。祭りはその後、毎年続けられることになるが、郷土料理研究会の成果や祭の経験を踏まえ、上村さんは2005年9月から「白保日曜市」の開催を地域の人たちに呼びかける。

しらほサンゴ村の施設を地域の人たちに開放し、毎月第3日曜日に郷土料理や、民芸品や工芸品の物販を地域の人たちが行うという試みである。

「当初は出品者が『恥ずかしいから』と対面販売を嫌がり、サンゴ村のスタッフが集落内を回って産物を集め、ボランティアが販売するなど、定着するまでに2年ほどかかりました。その後、月2回になりましたが、出品者の調整や会場の設営、会計や広報など運営に関する裏方をWWFが担ってきたのです」

白保日曜市は発展し、いまでは毎週日曜日に開催される白保集落の人気イベントにまで成長した。「ゆらていく憲章」に位置づけられた石垣、赤瓦、福木を活かした街づくりを進めるため、集落内の建物を囲む伝統的な石垣の再生事業にも取り組みを始めた。

この一環として、小学校のブロック作りの塀を石積みに再生するプロジェクトが開始された。集落の中に住んでいる石積み棟梁の協力を得て、集落の人たちと協力して3年がかりで伝統的な石積みの塀を完成させた。

「石積みでは、目に見えて地域が変わっていくので、コミュニティー内での村づくりへの理解が高まることを実感できた」と上村さんは振り返る。

持続可能性を担保する人づくり

このように2004年以降さまざまな取り組みが進められてきた白保集落であるが、現在の大きな課題はこれらの取り組みを維持する仕組みとそれを支えるための人づくりである。

「この課題に対処するために、2010年から各種活動の受け皿となるNPOづくりを始めたのです」

まず白保集落の人たちとNPOについて勉強会を始め、近隣の竹富島や西表島、渡名喜島、久米島などのNPOの人たちを招き、話を聞いた。その後、集落の人たちの中に、自分たちにもできるのではないか、地元の若者に雇用を創出できるのであればNPOを作ってみようではないかという機運が盛り上がった。

この結果、2012年12月に「夏花（なつばな）」が設立され、夏花は2013年5月には県知事認可のNPO法人となり、現在2人の職員を雇用している。夏花では今、白保のサンゴ礁や暮らしの文化の保全、継承と地域の活性化を両立するために白保の暮らし体験ツアーに力を入れている。

「多くの皆さんがこのツアーに参加してくださることが、サンゴ礁の保全活動の促進とNPO法人『夏花』の自立につながります」と上村さん。

上村さんは、みずからを「カタリスト」と呼ぶ。カタリストとは、「触媒」の役割を指す英語で、地域の人々の行動を呼び起こし、地域活動を促進させ、地域の大きな変化をもたらす専門家のことを指す。上村さんは、こうした役割の重要性をイギリスのグランドワークトラストで学んだという。

日本でもこうした役割の重要性に対する認知を高め、職能として確立したい。そのためには、自分が率先して実践し、その重要性を世のなかに示す必要がある。これが、上村さんの情熱を支える基盤になっている。

白保集落の人たちと一緒になって地域づくり、そしてサンゴ礁保全に取り組んできた上村さんの物語は、よそ者が、いかにして「地域人」になることができるのか、そのヒントを我々に教えてくれている。

上／農地からの赤土流出を防ぐために、白保では農地の周りに月桃を植え付けるプロジェクトが行われている。協力農家からは月桃の葉1枚を10円で買い取り日曜市で利用している。地元中学校に苗づくりの委託もしている。（写真提供：WWF）
下／復元された小学校の石垣。3年間かけて再生した。目に見える変化が起きることでコミュニティー内での村づくりへの理解が一気に増したという。

Naoya Furuta
大正大学地域構想研究所教授
三菱総合研究所を経て現職。
生物多様性に関する
グローバルな政策形成に取り組むとともに、
国内の自然資源を生かした
地域づくりにも関心を寄せる。

1白保で畜産業を営む宮良妙子さん。NPO法人夏花の理事でもある。コミュニティーがしっかりしていれば、環境が破壊されることはないとの信念で各種活動に取り組んでいる。2月桃を原料にしたルームデオドラント「sarmin（サーミン）」。WWFが白保日曜市の出品者と協働で開発した。原材料の月桃は、サンゴ礁保全対策農家から買い上げ、売り上げの一部をグリーンベルト植栽のための費用に充てるサンゴ礁保全型商品。3白保の暮らし体験ツアーでは、白保の家庭にホームスティして農業体験や集落の歴史などを学ぶプログラムもある。（問い合わせ先ともにNPO夏花　電話：080-8553-8848）（写真提供：WWF）

4WWFの支援によって開発された白保日曜市ブランドのハーブティ。全部で4種類ある。（問い合わせ先：グリーンズファーム）5 NPO法人夏花の花城芳藏理事長。夏花の事務局もしらほサンゴ村の中に置かれている。夏花とは木綿の花のことで、白保で唄い継がれている八重山民謡「夏花節」から命名した。白保の暮らし体験ツアーでは、花城さんみずからが集落散策のガイドをすることもあるという。（写真提供：WWF）6白保日曜市のロゴをあしらったオリジナルTシャツ。白保に縁の深いテキスタイルデザイナー MIMURIによるデザイン。7白保では、赤瓦とシーサーが伝統的な街並みを作り出している。